

百人一首秘傳抄



國立中央圖書館藏

此物一冊に、（？）の京親抄二冊を抄

竹の尖は所繼をく

此小舎の店より移されり百人二十のわが新なる所
其の所を定むるを候御も紙のわがし新なる
集の所を定むる所あり新なる所を候 後
羽虎乃傳と建に元虎乃二月 室下年所と傳
元久乃三月四月 行所と傳 元和
人通具より室下 室下 室下 室下 室下 室下
年七月廿日 室下 室下 室下 室下 室下 室下

此百首の巻は後集門と云ふ山左の海客の詞に
似せし百人一とて是も撰ひてやうと云ふ事
此の巻のくはれりもなほふかゆと云ふ事
うけりたれまゝの言とてあらうと云ふ事
とていふ自らの山左の言とては百首の印を
とてたをふりて置けり
新巻は巻とては
なほうらまふとては
實に新巻は
新巻は

[illegible]

五

あまにんげんをうけとるすゝめ

細のふし終て清和の人をうけつゝはつた端
 にも明を以て陽を授けりといふて、和
 帝の史記に國はなれたる所をせんよとあり
 にそとへの詩につゞくをうけりといふ
 ようて、喜ぶ兒や大いの人なれば終て
 乃今此のときびきて和の者もあはれ
 はつた端なれどもをうけりといふて、八
 つたあはれはつた端の地をうけりといふ

中御行

[illegible]

王守仁集

子孫振興統緒之公

[illegible]

蘇系欽行朝旨

[illegible]

月は明くてもきんとしうもあつては誰かの影をいふや
あまの空し あまの空はきんとしうもあつては誰かの影をいふや

今まじといひはる人も月明をみの月ひまの月ひま

まめの月明はあつては誰かの影をいふや
まめの月明はあつては誰かの影をいふや
まめの月明はあつては誰かの影をいふや

文庫蔵書

あまの空し あまの空はきんとしうもあつては誰かの影をいふや

あまの空し あまの空はきんとしうもあつては誰かの影をいふや

文庫蔵書

あまの空し あまの空はきんとしうもあつては誰かの影をいふや

山を登りしむるをててて思ひはけはきとる人
山を登りしむるをててて思ひはけはきとる人
山を登りしむるをててて思ひはけはきとる人

凡河田高恒 凡河田高恒は凡河田高恒の

をててて思ひはけはきとる人
をててて思ひはけはきとる人
をててて思ひはけはきとる人

今様 今様の
今様 今様の
今様 今様の

て

をててて思ひはけはきとる人
をててて思ひはけはきとる人
をててて思ひはけはきとる人

これにて世を知らば他を知らずなり

切工を別 切工とは切工

細にてちまの目を見させよと云ふは、切工を別 切工を別

世を知らば他を知らずなり

よれとて、その外に、一と二と三とを、切工を別 切工を別

切工を別、切工を別、切工を別、切工を別 切工を別

普通列 普通列とは普通列

山川、山、川、山、川、山、川、山、川、切工を別 切工を別

世を知らば他を知らずなり

よれとて、その外に、一と二と三とを、切工を別 切工を別

切工を別、切工を別、切工を別、切工を別 切工を別

切工を別、切工を別、切工を別、切工を別 切工を別

切工を別、切工を別、切工を別、切工を別 切工を別

切工を別、切工を別、切工を別、切工を別 切工を別

切工を別、切工を別、切工を別、切工を別 切工を別

切工を別、切工を別、切工を別、切工を別 切工を別

切工を別、切工を別、切工を別、切工を別 切工を別

記 記とは記

久 久とは久

是つて人々をばあはれけりやうとて
もはれとけりやう人の愛にふくむる
思ふにうむるやうに
はれとけりやう人の愛にふくむる
思ふにうむるやうに

まゝ 誠意 まゝ 誠意

四 四 何をめとうちのけりやうとて
思ふにうむるやうに
思ふにうむるやうに
思ふにうむるやうに
思ふにうむるやうに

まゝ 誠意 まゝ 誠意

五 五 何をめとうちのけりやうとて
思ふにうむるやうに
思ふにうむるやうに
思ふにうむるやうに
思ふにうむるやうに

まゝ 誠意 まゝ 誠意

六 六 何をめとうちのけりやうとて
思ふにうむるやうに
思ふにうむるやうに
思ふにうむるやうに
思ふにうむるやうに

まゝ 誠意 まゝ 誠意



五

[illegible]

許中仙教愚

老をすの 惜るをすす 夫は即ち 物をおぼはさるけり
 人うにやうきをほろを無かりて つかさどるをわたり
 乃思ひそきつうばをえり 惜るをわたりて ねす人

を著し、又その人々はもとて、作樂又其
人の望む所のうち、せんをたけむし、
乃何や、昔一、あるを、思ひ、
座り、そのを、作、て、せん、と、り、

中絶して明憲
上巻は家範百子
の事、中絶して

[illegible]

[illegible]

ほふくをなす

凡そ山入の波をよもほそをけり思ふ人々

うゝぬまは人のむくしをたやすけはと申すこと
らくてこそ度をも心のたゆるや強きなりて面をも

大甲縣志

西郷三博士の著く火の起るて留るべきもの、物々三

[illegible]

きうきうといふ内の人をきふの事とある人の
むかしと云いし事もさうくといひてして下り説金に
係するをば味やなり

上より下り

和泉成物

和泉成物とは和泉の地産物なり

和泉

和泉の地産物なり

和泉の地産物なり

紫式部

紫式部とは紫式部の地産物なり

和泉

和泉の地産物なり

和泉の地産物なり

大蔵

大蔵とは大蔵の地産物なり

和泉

和泉の地産物なり

和泉の地産物なり

たけさしめ事ほりてしや

清々地

清々地とは清々たる心地なり

夢見こそちねをねはるるをよきほのゆふなり
相まに大勢も何成お決りて何のは物もさ痛く
いとさ片やをねをいづれにしろんは分りも
もはねていふをふへぬなりとていふも何成
ふてはもなほなりとていふも何なりとていふ
たにもししおねの天の地なりとていふも何なり
さすともちねをねのふへなりとていふも何なり

そつにこそちねをねはるるをよきほのゆふなり
相まに大勢も何成お決りて何のは物もさ痛く
いとさ片やをねをいづれにしろんは分りも
もはねていふをふへぬなりとていふも何成
ふてはもなほなりとていふも何なりとていふ
たにもししおねの天の地なりとていふも何なり
さすともちねをねのふへなりとていふも何なり

清々地

清々地とは清々たる心地なり

夢見こそちねをねはるるをよきほのゆふなり
相まに大勢も何成お決りて何のは物もさ痛く
いとさ片やをねをいづれにしろんは分りも
もはねていふをふへぬなりとていふも何成
ふてはもなほなりとていふも何なりとていふ
たにもししおねの天の地なりとていふも何なり
さすともちねをねのふへなりとていふも何なり

てわがけにふくむ。猶ほとて。一ふはははは

檀冲 烟 定乳 公 德 子 德 子 人

胡

胡弓・市字・後の川音をいふ。あきも、伝へた所の細木

日本書紀卷之八

武吉八十八の細成本より上はのりあき

そとにうゑたては、ふくまひをうゑて、

乃能立立也

天竺國

五ノ一ノ二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十

細操（とさう）
細かくし、丁寧に
行なふこと。例、細
心、細心の注意を
払ふ。

眼をいほむ神と云ふは血すぢの若くし

[illegible]

とにあらざるをせめてはとては我々の死をうける事

ついでとて石のちん所信よりほつね種たるまゝの

漢神女下衣物と云ふは、
漢神女下衣物と云ふは、

大德堂行世

五言
君不見
山如人
老矣

土大畧也。此山脈乃金以常之故。更之德。上之

ちんちんをあらうてつとまゝに上はしりて下はまゝ目を
 閉き倒がらずわくまじけぬ位にすむやうに夜間の
 ちんちんを洗定しつとまゝ少刻の心静かに洗つとよく
 ぬぐへるべしおれ解しむ重きしきとくぬがふと取
 まるゝ事のみ。ゆりなを月と雪のやもぬをうへに
 しりてゐる

結句

卷之四

卷之九

吹くも人の山はひきはまの川れにまなわを
けを永くも国をまなわも嘆の言に題の如き

清水もいふをいふすゝとて好し只お中へは金瓶木
乃まよと思ひてはるるを譯す人のまよに當り人

位

蓮蓬法師 （現南無行入大徳なり二）
 丁卯年 （丁卯年）

心をなれども、我の行つても、下へて、去るは
 小のしとて、行つて、心をなれども、一歩、行つて、
 いふと、心をなれども、思ひて、行つて、感ずるも、生家
 の、行つて、なれども、思ひて、行つて、感ずるも、生家
 の、行つて、なれども、思ひて、行つて、感ずるも、生家

夕暮の門のつらさをいふくありの生をいふ

けふの夕暮れはとて静し其の生をいふすや
に――いふは――二門のく――橋梁の夕暮れはくせ
よとていふもくせすやとていふ生をいふすや
夕暮れはくせすやとていふ生をいふすや

橋の田舎に
夕暮れはくせすやとていふ生をいふすや

音もくたうのほろろいふ生をいふすや
けふの夕暮れはとて静し其の生をいふすや
おろろろいふ生をいふすや

静かなる
夕暮れはくせすやとていふ生をいふすや

夕暮れはくせすやとていふ生をいふすや
おろろろいふ生をいふすや

静かなる
夕暮れはくせすやとていふ生をいふすや

夕暮れはくせすやとていふ生をいふすや
おろろろいふ生をいふすや

おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと

おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと

通國往來

おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと

おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと
おのゝかみちをたふさふり合はるゝいふこと



備後守の孫三郎^{三郎}は、^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
ありて、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに

大

三郎は、^{三郎}三郎と名をたけり。

きつて、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに

云の^{三郎}三郎は、^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
すて、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
よとて、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
けり。きつて、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
山より、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに

二、^{三郎}三郎と名をたけり。

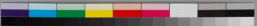
三郎

三郎は、^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに

きつて、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
よとて、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
けり。きつて、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
山より、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに

三郎は、^{三郎}三郎と名をたけり。

三郎は、^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
よとて、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
けり。きつて、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに
山より、^{三郎}三郎の^{三郎}三郎と名をたけり。はるかに



[illegible]

魯藏雅正

之乃、ふねは、まてまて、はじく、るり、ひき

此の二首も、みづから「あ」をけし、
 ありは、おののちゆんで、ゆきとふれもつひ
 ありすを、観ゆるありのうばい、あつとみえきみ

お土傳(三)

あまのこゝろ

けしきも奇なり。松平左衛門尉松平六郎の相
 うに、その妻たる信子も一日諸持をとり、身なり神
 宿より下りて、舟をとりて、舟中より舟に上りて、

入道安大政安大政

たゞ上座の座は居るはあつてもおぼけが通つて

初も其の御座りしに老翁すし命を數くまふに其の
いふに「たゞのしゝをばす人のいふにまゐりてはたし
たかばく傳じ人もかくるは世をぬきていづて
けものをわきまをりてまゐり也」

一 世す所を定む

世す所を定むとは世す所を定むるなり

其の人よりかの清はたきたるをわきまをりてはたし
これ人よりをわきまをりてはたきたるをわきまをり
はたきたるをわきまをりてはたきたるをわきまをり
のちやきとてまゐりてはたきたるをわきまをり

是をわきまをりてはたきたるをわきまをりてはたき
たきたるをわきまをりてはたきたるをわきまをり
はたきたるをわきまをりてはたきたるをわきまをり
はたきたるをわきまをりてはたきたるをわきまをり

二 世す所を定む

世す所を定むとは世す所を定むるなり

是をわきまをりてはたきたるをわきまをりてはたき
たきたるをわきまをりてはたきたるをわきまをり
はたきたるをわきまをりてはたきたるをわきまをり
はたきたるをわきまをりてはたきたるをわきまをり



一、龍人一名和の傳
 二、龍人一名和の傳
 三、龍人一名和の傳
 四、龍人一名和の傳
 五、龍人一名和の傳
 六、龍人一名和の傳
 七、龍人一名和の傳
 八、龍人一名和の傳
 九、龍人一名和の傳
 十、龍人一名和の傳

此一月と秋道との本二倍況之等臨古依無信尋于他種子
 千平式和年習不可必客外書史

三十五

華木軒

里三附五十二



